

「民間連携ボランティア・日本語教師」

大塚 麻実

OTSUKA Mami

子どものころからのあこがれ
社会人になって実現

「知らない世界を知ることが好きで、大学時代からいつかは自分も青年海外協力隊に参加したい」と思い、頻りに協力隊関係のセミナーに参加していました。今の就職先を選んだのも、九州で初めて民間連携ボランティア制度を導入した会社だったからです」

大塚麻実さんは2015年、長崎の建設会社である株式会社小川工務店に入社した。同社の小川寛代表取締役は協力隊員としてケニアで活動した経験を持ち、社員の協力隊派遣に積極的だ。「派遣先の人たちと積極的に交流し、不足を知る、ということを感じてほしい」と話す小川社長。ボランティア経験を通じて培われた人間力を家族や地域、社員へ還元し、豊かな人生を送ってほしいという思いから、勤め先に籍を置きながら協力隊に参加できる民間連携ボランティア制度に、社

PROFILE

大分県出身。長崎外国語大学外国語学部でフランス語と日本語教育を学ぶ。2015年に卒業した後、株式会社小川工務店に入社。民間連携ボランティア制度を活用し、同社総務部に在籍しながら、今年1月から青年海外協力隊(日本語教師)としてセネガルの首都ダカールで活動中。

JICA Volunteer Story



大塚さん(写真左)と日本で流行のダンスの振り付けを学ぶ学生たち。言葉を教えるだけでなく、文化や心の交流も大切にしている

「相手の思いに寄り添い、互いの文化をつなぐ」

西アフリカにおける貿易の中心地であるセネガルの首都ダカール。ここで日本語教師として、セネガルと日本の架け橋になるべく奮闘しているのが、民間連携ボランティアの大塚麻実さんだ。



を挙げて協力している。念願かなって、大塚さんが民間連携ボランティアとしてセネガルに派遣されたのは、今年1月のことだ。

今、大塚さんが活動しているのは、ダカールにある私立大学の経営高等学院大学。同大学にはアジアの言語や文化を学ぶ「アフリカアジア研究所」が設けられており、ここで大塚さんは1年生70人、2年生10人に対して日本語や日本文化を教えている。将来、国際社会での活躍を志す学生たちの日本への関心は高く、授業では毎回、質問が飛び交うという。

アニメや歴史通じて日本に興味 次はセネガルを日本に発信

大塚さんが現地で痛感したのは、自分の思いや日本文化を伝えるには、まず相手の事情や文化を理解することが大切だということだ。

そう考えるようになったきっかけは、日本語や日本文化を学ぶ部活動「にほんくらぶ」の部長、フアティマさんとの交流にある。

大塚さんは現地に着任した直後から、「にほんくらぶ」の顧問を兼任することになった。初めてフアティマさんと会ったとき、大塚さんは「どうやって部員を増やすか」「クラブをどんな方向に発展させていくか」など、実務的な質問を矢継ぎ早に投げ掛けた。だが、フアティマさんから返ってきたのは、「分かりません」という心細げな返事だった。

「当時、私は、早く行動を起こさないと」という焦りから、彼女の優柔不断な態度にいら立ち、いつしか会話にも笑顔がなくなっていました」

そんなある日、大塚さんは、フアティマさんの両親と会うことになった。「娘にとって、日本という国は特別なんですよ。どうしてこんなに夢中になれるのか、不思議なくらい」。娘の、日本への熱中ぶりを楽しそうに語る彼女の姿を見て、「私はクラブの拡大ばかり気に



a.世界的スター・ミュージシャンのユッサー・ンドゥールを生んだ、音楽の国セネガル。日本語も歌を生かして覚えていく
b.セネガルの布といえば、ろうけつ染めの鮮やかな柄が特長だ。その布で、浴衣を作った
c.日本語を学ぶに当たって最初の難関は、ひらがなを覚えることだ
d.折り紙で作った、5月のポスター

して、フアティマさんのことを理解しようとしていなかった」と反省したという。

その翌日にフアティマさんと会ったとき、大塚さんはクラブ活動については話さず、彼女の好きな日本のアニメや日本に関心を抱いたきっかけを尋ねた。すると会話が盛り上がり、別れ際にフアティマさんから「今日、大塚先生のことでもたくさん知ることができてうれしかった」と言われた。その後、クラブ活動に関しても、フアティマさんは積極的に意見を出すようになった。

やりたいことを進める上では、まず相手を理解することが大切。大塚さんは、その後もこうしたスタンスの下、現地の人々と関係をつくる努力を続けている。

その一つが、過失時に「ごめんなさい」と謝る文化の普及だ。大塚さんは着任当初、学生たちが授業に遅刻しても謝らないことに戸惑ったという。その後、セネガルで暮らすうちに分かってきたのは、同国では相手をめつたに非難したり批判したりしない代わりに、謝罪もあまりしないということだ。

そこで大塚さんは、遅刻した学生を責めるのではなく、「私は時間どおりに来て待っていたんだよ」とやりわり伝えるようにした。すると、学生たちは、自然と「遅れてごめんなさい」と謝るようになり、遅刻する学生の数も減ったという。

「相手を理解し、問題の原因を追究した上で適切な解決策を探る力は、帰国後に日本で仕事する上でも生きてくるのではないかと思います」

現地に来てから8カ月が過ぎ、彼女の熱意は新たな段階に向けられている。「セネガルには、アニメや漫画、広島や長崎の歴史など、日本に関心を持っている人が多くいます。一方で、セネガルについて知っている日本人は少ない。今後、日本語を学ぶセネガル人からインターネットを通じて日本へ何か発信できないか、学生たちと一緒に話し合っているところです」。セネガルと日本の架け橋を目指す彼女の挑戦は、これからが本番だ。